

中期モンゴル語の/h/と/q/について

中村雅之

1. はじめに

15世紀のいわゆる乙種『韃靼館雑字』について、吉池孝一氏は当時モンゴル語の/q/はすでに摩擦音[x]になっており、その前提として少なくとも男性母音の前の/h/はゼロになっていたと論じた(吉池2003)。これは、乙種『韃靼館雑字』において語頭にh-をもつはずの語のうち「哈(h-)泥思哈」(眉)、「忽(h-)羅勒」(唇)などいくつかの語のウイグル文字表記がq-に相当する文字で記されていること、さらに14世紀末の甲種『華夷訳語』で「忽(h-)格兒」(牛)、「呵(h-)羅捏」(西)、「豁(h-)黒脱兒忽」(虚)と表記された語が、乙種『韃靼館雑字』においては「兀(ゼロ-)格兒」「阿(ゼロ-)羅捏」「幹(ゼロ-)黒脱兒忽」と表記されていることなどからの合理的な結論である。吉池氏が「語頭のh-は、少なくとも男性母音に前接するものに就いて、すでにゼロとなっていた」としたのは慎重を期した表現で、実際には女性母音の前であってもかつての/h/はすでにゼロになっていたと考えていいだろう。つまり、乙種『韃靼館雑字』では、①かつての/h/はゼロになっていた、②/q/の音価は摩擦音[x]であった、③ゼロになっていたはずの/h/をウイグル文字で表記する際、漢字表記を参照したため、摩擦音化していた/q/によって表記した例が少なからずある(=過剰矯正)。

このような15世紀の状況は、それ以前の13~14世紀においても同様に存在したのではないかと、というのが以下に述べる所である。

2. 元代の『蒙古訳語』(『事林広記』所収)における「兀哥兒」

『蒙古訳語』では総じて語頭の/h/は保存されているように見える。しかし、「牛」を意味する語は「兀哥兒」と綴られ、パスパ文字表記「heuker」¹や甲種『華夷訳語』の「忽(h-)格兒」とは異なり、語頭は「兀(ゼロ-)」である。なお、和刻本(『至元訳語』と題されている)では「无」に作るが、「兀」の誤記と考えてよからう²。長田 1953 ではこれを「互(h-)」に訂正しているが、やや無理がある。「无」と「互」はそれほど似ていないし、何より hu-/hü-に対して「互」が用いられた例は、『蒙古訳語』・甲種『華夷訳語』・乙種『韃靼館雑字』を通じて見当たらない。

乙種『韃靼館雑字』の状況を念頭に置くならば、『蒙古訳語』の「兀哥兒」は単なる例外というより、実際の口語音の反映と考えるべきであろう。つまり、『蒙古訳語』では、語頭の/h/をあるべき音として想定しているのだが、実際の口語ではゼロになっており、それが「兀哥兒」として表れているという訳である。

¹ パスパ文字のローマ字転写は吉池 2003 による。なお、パスパ文字モンゴル語の「eu」は女性母音/ü/を表す。

² 仮に「无」であっても、語頭子音がゼロであることに変わりはない。「无」は微母の字であり、唐代以来、西安(長安)を中心とする西北地域では[v-]であったが、元代以降の北京(大都)を中心とする東部北方地域では[w-]~[u-]であり、韻母[-u]の前ではゼロ声母であったと思われる。崔世珍による『朴通事』のハングル注音(右側音)で「霧」を「'u」(/u)とするのはその一例である。現代北京音もちろんその線上にある。

3. 13 世紀のウイグル文字表記の状況

すでに中村 2010 で述べたことであるが、13 世紀のモンゴル口語に/h/がなかった(ゼロであった)と考えるべき最大の根拠はウイグル文字モンゴル語で/h/が全く表記されないことである。ウイグル文字は原則としてモンゴル語の音素を全て表記している³。もしも当時のモンゴル口語に音韻としての/h/があったならば、それを一切表記しないというのは不自然極まりない。特に、漢語語彙の/h/がウイグル文字モンゴル語においても明瞭に表記されている以上⁴、モンゴル語の/h/が表記されないのは、実態としての音素/h/がモンゴル語の中に存在しなかったためと考えるのが理に叶っている。

4. パスパ文字の「h」

1269 年に公布されたパスパ文字では、文字として「h」が用意されており、「heuker」(牛)のように語頭に「h」を持つモンゴル語の語彙は相当数にのぼる。これを素直に解釈すれば、当時のモンゴル語に音素/h/があり、それを「h」で表記したということになる。しかし、この点に関して私は些かの疑義を抱くものである。

まず、喉の破裂音では調音点の前後によって「q」と「k'」(あるいは「q」と「g」)の書き分けがある⁵。男性母音とともに用いられる場合には「q」、と女性母音とともに用いられるには「k'」「g」である。ところが摩擦音である「h」にはこの種の書き分けがない。したがって、仮に/h/が存在した場合、その音価は[χ]～[x]ではなく、[h]であったことになろう。[χ]～[x]であれば必ずや男性語と女性語で文字上の書き分けがなされたはずだからである。そして/h/という音素が[h]という音声をもってモンゴル語の中に存在していたとすれば、音素/q/の音価は摩擦音[χ]ではなく破裂音[q]であったと考えるのが自然である⁶。[h]と[χ]が音韻的に対立する言語がないわけではないが、北東アジアの言語にそのような対立を求めるのはあまり説得的ではない。そしてパスパ文字モンゴル語の表記だけを見た場合、この想定(/h/が声門摩擦音[h]、/q/が口蓋垂破裂音[q])に矛盾はない。問題はパスパ文字漢語の表記法との整合性にある。

パスパ文字の字形はそのほとんどがチベット文字を材料として作られているが、漢語表記用のパスパ文字はチベット文字ではなく、直接にはモンゴル語用のパスパ文字を基にして作られている⁷。そこで問題の/h/ (三十六字母では曉母と匣母に相当⁸)を見ると、曉母は全て「h」(=h2)で表記されるが、匣母では、直音の場合は「q」を基に新たに作った「γ」を用い、拗音(-i-介音を含む音節)には h2 とわずかな差しかない h1 を用いている。つまり、匣母には「γ」と「h1」という二種類の字母が用

³ 例外はウイグル語由来の語彙で、jrlγ(聖旨)、tngri(天)などでは母音の省略が見られる。

⁴ 「喜(/hi/)」→「qi」、「興・行(/hiŋ/)」→「qing」、「翰(/han/)」→「qan」、「徽(/huai/)」→「kui~qui」、「賢(/hien/)」→「ken」、「洪(/huŋ/)」→「kung」など。転写はLigeti 1972による。

⁵ 「q」は無声/q/と有声/q/の双方に用いられる。「k'」は/k/、「g」は/g/に用いられる。

⁶ 音素/k/はかなり後まで摩擦音化しないので、ここでの議論には関係がない。

⁷ それを如実に示す例は、滂母(/p'/)を表す文字がチベット文字の「p'」から作られず、「b」をほんの少し変形させて作られたことである。これはモンゴル語に音素/p/がなかった(したがって文字「p'」が作られなかった)ことによる。チベット文字「p'」はモンゴル語表記には採用されなかった(不要であった)ために、漢語の/p'/には引き当てられる字形がなく、「b」を変形して作らざるを得なかったのである。

⁸ 曉母は中古音以来の/h/であり、匣母は中古音で有声音だったがパスパ文字創製当時の北方漢語では曉母と同じく/h/になっていた。

いられているのである。もしもモンゴル語に[h]があり、漢語の曉母・匣母をモンゴル人が[h]と認識していたのであれば、このようなことは起こり得ない。匣母に「γ」と「h1」の二種の表記が存在することは、モンゴル語話者が漢語の摩擦音を[χ]と[x]のような調音点の異なる二種の音として認識したことを意味する。そこで、喉の摩擦音として一種類の[h]しかなかったモンゴル語の話者が、なぜ漢語の摩擦音を二種の音としてとらえたのかということが問題になる。

私見では、この不自然さは当時のモンゴル口語に/h/([h])があったという誤った前提がもたらしたものである。13世紀のモンゴル口語においてすでに/h/が存在しなかった(ゼロになっていた)と仮定すれば、上の事実は容易に理解される。モンゴル語の/h/がゼロであったとすれば、漢語の摩擦音/h/はモンゴル語話者にとって破裂音(/q/および/k/)に対応すべき音として認識されることになる。そして破裂音は調音点の前後によって二種の文字で表記される習慣であるから、漢語の匣母もその習慣に従って、「γ」と「h1」という二種類のパスパ文字で表記された訳である。曉母にはモンゴル語で用いられていた「h」をそのまま利用したが、匣母に新たな表記を作る必要に迫られた際にその音声を吟味する機会があり、「γ」と「h1」という漢語ネイティブでは思いもよらない表記区分が生まれることになった。

5. 中期モンゴル語の/h/と/q/

以上のように、13世紀のモンゴル口語にはすでに/h/がなかったと考えられる。パスパ文字モンゴル語や漢字音写モンゴル語において語頭に「h-」を持つ語が多く見えるのは、理論的にあるべき音としてのh-であり、そのような音は歌謡や伝統芸能のような特殊な場で受け継がれてきたものなのではあるまいか⁹。そして乙種『韃靼館雑字』の作られた15世紀においては、芸能におけるそのような習慣も廃れてしまい、表記上の混乱が生じたということであろう。

なお、13世紀に/h/がなかったことに関連して、/q/の実際の音声には、破裂音[q]の他に異音として摩擦音[χ]があったのではないかと想像する。それは、13～14世紀のウイグル文字モンゴル語における漢語語彙の表記で、漢語の/h/を「q」で表記する例が圧倒的に多いからである。「喜(/hi/)」→「qi」、「興・行(/hiŋ/)」→「qing」のように、前舌母音[i]の前でも「k」でなく「q」が用いられているのは、/q/に異音として[χ]があったと想定しなければ説明しにくい。

<参考文献>

長田夏樹1953,「元代の中・蒙對譯語彙『至元譯語』」,『神戸外大論叢』4-2/3:91-118;長田夏樹

2000,『長田夏樹論述集』上:15-64. 京都:ナカニシヤ出版.

Ligeti, Louis 1972. *Monuments Préclassiques* 1, Budapest.

吉池孝一 2003,「韃靼館雑字のh-について」,『KOTONOHA』4.

吉池孝一 2005,「パスパ文字の字母表」,『KOTONOHA』37.

中村雅之 2010,「中期モンゴル語の/h/について」,『KOTONOHA』97.

⁹ 歌謡における類例として、日本語の[wo]を挙げてもよいかも知れない。日本語においては、いくつかの地域を除けば、[wo]は口語に存在していない。ところが歌をうたう場合にはしばしば[wo]が現れる。(ただし、必ずしも歴史的な[wo]と一致するわけではない。) また、漢語を例に取れば、京劇において、いわゆる尖団の区別([tsi]と[tei]の区別など)が守られており、芸能における保守性を示している。